

「たびら」は

まるごと「自然園」

「たびら昆虫自然園の挑戦」

ブツレアの花にとまるアカタテハ。珍しい昆虫はいませんが、田平町内にある昆虫を豊かな自然の中で観察できます。



里山の環境を再現し、さまざまな昆虫を観察できる「たびら昆虫自然園」。

今年の7月に開園30周年を迎えます。

施設の老朽化や解説指導員の高齢化などの課題を抱えながらも

地域の関係者や長崎県立大学とタッグを組み

新たな取り組みにチャレンジしています。



1



2

1_栗林慧さんの写真教室の参加者の皆さん。館内には栗林さんが撮影した大迫力の昆虫写真が展示されている。/2_標本展示室の壁一面に展示された昆虫標本。世界の珍しい昆虫を見ることができる。

平成から令和へ、開園30周年

田平町荻田免の山林にある「たびら昆虫自然園（以下、昆虫自然園）」。里山の環境を再現した園内では、昆虫などのさまざまな生き物や植物を見ることが出来ます。平戸に住んでいる人なら、学校の野外学習や子どもを連れて訪れたことがある人も多いのではないのでしょうか。

そんな昆虫自然園が、7月に開園30周年を迎えます。これまで昆虫との触れ合いを通して、子どもたちが命の尊さや自然環境の大切さを学ぶ場として、また、豊かな自然に恵まれた郷土の魅力を「昆虫の里」として高めてきました。

今回は、これまであまり注目されることのなかった昆虫自然園の真の魅力や、さまざまな課題を抱えながらも目前に控えた開園30周年を盛り上げようと、一生懸命に取り組むスタッフたちと地域の関係者の奮闘ぶりを紹介します。

はじまりはかんきつ園

昆虫自然園は、かんきつ類の品種改良を行う長崎県の施設だった跡地を有効に利用しようと、田平町在住

の昆虫写真家栗林慧さんら有志でつくる地元環境保護グループの提案を受け、長崎県や田平町が約3年をかけ整備しました。

施設の管理運営を担うこととなった田平町では、当時の園長である西澤正隆さんを中心に解説指導員と呼ばれるガイドの養成に奮闘し、来園者に対する解説案内の体制を整え、平成4年7月21日にグランドオープンを果たしました。

その後、「第8回全国昆虫施設連絡協議会」を開催し、平成17年8月には西海国立公園を舞台に開催された「第47回全国自然公園大会」に出席されていた常陸宮正仁親王同妃両殿下を迎えるなど、全国的にも珍しい屋外体験型の昆虫園としてこれまでに毎年約1万人の来園者が訪れています。

平成21年には、当時の田平天主堂の烏山邦夫神父から、約1,500種6,000点にもなる外国産の昆虫標本の寄贈を受け、翌年には昆虫館に標本展示室を整備。平成18年9月からは指定管理者制度を導入し、現在は「一般財団法人平戸市振興公社」が普段の施設運営を担っており、子どもから大人まで楽しめる施設となっています。

Information

○営業時間

午前9時～午後5時（休園日：毎週月曜日および年末年始。ただし、月曜日が祝日の場合はその翌日。7月20日～8月31日は毎日開園）

○利用料金

▼大人・高校生 410円 ▼小・中学生 310円

▼幼児（4歳以上） 150円 ▼乳幼児（3歳以下） 無料

※団体割引あり（20人以上）、障がい者手帳をお持ちの人は無料。



たびら昆虫自然園



今村さんが出題したクイズに答える若葉保育園の園児。
若葉保育園では年中と年長の園児が毎月訪れています。

1_園内にはミカンやビワなどの果物が実る。見学途中にミカンで水分補給。
2_教えてもらったクワガタの持ち方にチャレンジ。挟まれないように気をつけて！/3_キアゲハの幼虫を発見。やさしく触ってみる。/4_夏の夜に開催される「夜の観察会」。子どもたちに大人気のカブトムシやクワガタをあちこちで見ることができる。



今村さんは「場所や季節、天気、時間帯で現れる昆虫も変わります。それに合わせて私たちの説明や体験の内容も臨機応変に変えていますので、何度来ても毎回違う解説を聞くことができますよ」と園の魅力を話してくれます。

約4ヘクタールの広大な敷地が広がる昆虫自然園には、畑や小川、池、雑木林、草原など4つのゾーンがあります。一見、雑然とした藪に見える場所もありますが、多様な昆虫が生息できるよう植物の配置などが細かく設定されています。そのため、それぞれのゾーンで、生息する昆虫も草花も異なります。

また、時間帯や天候、季節が変われば見ることができる昆虫の種類も変わります。昆虫自然園では、限られた季節や時間帯にしか見ることができない昆虫を観察するイベントとして「夜の観察会」や「鳴く虫の観察会」などを開催。昆虫好きの子どもを持つ家族などに人気のイベントになっています。

何度来ても楽しめる
験は、園児たちが成長してもずっと心に残り続けます。

広がる自然や昆虫との出会い

たびら昆虫自然園で大冒険

全国でも珍しい屋外体験型の施設であるたびら昆虫自然園。受付のある昆虫館から一歩外に足を踏み出すと、そこには里山の自然が広がり、さまざまな昆虫や季節の草花との出会いが待っています。さあ、ワクワク・ドキドキの冒険の始まりです。

Interview



若葉保育園 園長
牧山 マサ子 さん

「命を大切にする気持ちや思いやりの心が育まれています」

当園は昆虫自然園の近くにあるため、園児たちは毎月ワクワク・ドキドキの野外学習に出掛けています。私も1月に一緒に行きましたが、館内から一歩外に出るとカブトムシの幼虫、落葉樹にはカマキリの卵、ミノムシなどが観察できました。また、道脇に置かれた巣箱にはミツバチ、観察池にはカエルの卵やオタマジャ

クシ、石の下や枯葉が積もった中にも小さな命が輝き、昆虫たちが共存していました。昆虫が苦手だった子どもも帰ってきたときには、教えてもらった昆虫について楽しそうに話してくれます。この野外学習を通して、命を大切にする気持ちや思いやりの心が育まれていると感じています。

「この虫なあに？」「あっちになんかおる！」園内に子どもたちの元気な声が響きます。この日、昆虫自然園を訪れていたのは、若葉保育園ゆり組の園児たち。昆虫自然園の今村武さんの説明を真剣なまなざしで聞きながら、次々に昆虫を見つけていきます。

昆虫自然園は、解説指導員と呼ばれるガイドが来園者と一緒に園内を回り説明・案内する全国でも珍しい施設です。昆虫自然園主任で解説指導員としてガイドも行っている今村さんは「園内には、さまざまな昆虫が草むらや葉の裏などいろんなところに潜んでいます。それを来園者が自分たちで見つけることは、昆虫に詳しい人でない限り難しいです。私たちが来園者の目線に合わせて説明し、実際に昆虫を触ってみたり、クイズに答えてもらったりと五感を使った体験を交えて案内することで、来園者の記憶に残るように工夫しています」と話します。

クワガタの持ち方を教わったり、園内に実っているビワや夏みかんを食べたりとはじめての体験に目を輝かせる園児たち。こんな日の体

見て・聞いて・触ってワクワク

園を支える大黒柱

昆虫自然園に欠かせない存在である「解説指導員の会」の皆さん。開園当初に発足したこの会では、来園した人たちにどうやって楽しんでもらえるか、記憶に残る体験をしてもらえるか、創意工夫しながら歩んできました。



としこ
解説指導員の戸田利子さん。家族で昆虫自然園を訪れたことで昆虫に興味を持ち、今では立派な解説員の1人として活躍している。

田平に招かれ開園準備に奮闘

開園前年の平成3年4月、それまで東京で高校教師をしていた私は、昆虫自然園の設計をしていた知人に誘われ、37歳のときに田平町で開園準備を始めました。

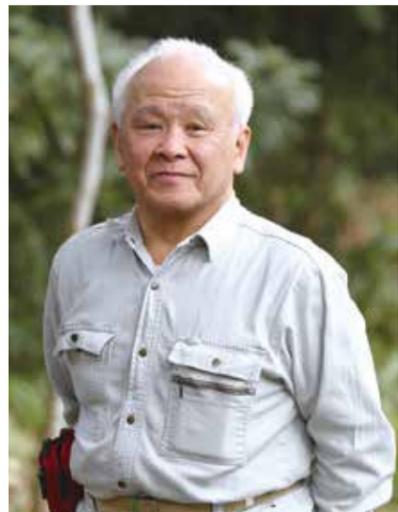
しかし、田平町に来た当初は「農業主体の田平に害虫公園をつくるのか」という批判の声さえあり、地元の人間ではないため、地域のみならず、どこにどうしたら受け入れてもらえるか大変苦労しました。

そこで、2つの目標を立てました。1つ目は地元の自然環境を把握して、どのような昆虫などの生き物が棲んでいるのかを知ること。2つ目は田

平町内の皆さんとの繋がりをづくり、いろんな意見を取り入れながら根気強く人間関係を築くことでした。

園を訪れた人に、昆虫のように小さく隠れている生き物を自然のまま見せるには無理があり、まして自分たちで探し出すことは至難の業です。そこで、私がかつて行なってきた自然観察を来園者と一緒にできないかと考え、解説員と来園者が園を一緒に回れるような仕組みづくりに取り組みました。また、あらかじめ用意したマニュアル通りに昆虫の名前や生態を伝えるのではなく、季節ごとの自然の楽しみ方を、園での体験を通して伝えたいと考えました。

そこで園では、解説員養成講座を



たびら昆虫自然園 元園長

まさたか
西澤 正隆 さん

たびら昆虫自然園の開園に携わり、解説指導員が案内する体制整備に尽力。好きな昆虫は淡い水色のはねを持つ大型の蛾「オオミズアオ」。



西澤さんの熱のこもった解説は、子どもから大人まで惹き付ける。



正月用の門松作りに参加した解説指導員の皆さん

開講し、10回の連続講座の修了者の中から、興味のある人に解説指導員になってもらいました。平成4年に解説指導員の会を発足させましたが、この会の活動が今でも最も大きな支えになっています。

開園当初は何もない昆虫自然園でしたが、夏休みに帰郷した家族やその子どもたちの「訪ねてみたら楽しかったよ」という声に積み重なり、少しずつ地域の皆さんにも理解が広まっていったように思います。

繋がりを築き、解説を磨く

これまで昆虫自然園では、解説指導員の会として屋外体験型という特徴を活かし、少年昆虫クラブ活動、標本づくり教室、自然体験教室、写真コンクールなどの年中行事をはじめ、学校団体や小学校教職員の研修の受け入れ、出前授業、園外での講演活動、視察の受け入れなどを通じて、多くの人たちとの繋がりを築いてきました。

特に近所の若葉保育園では、「昆虫自然園での自然や生き物との触れ合いの中で命の尊さを体験する」ということを保育目標に掲げており、いつも元気のいい園児たちが訪問し

てくれます。この園児たちとの触れ合いや子どもたちにもわかりやすく丁寧な案内を重ねることによって、解説指導員の説明の仕方にも磨きがかかりました。

知識ではなく意識を伝える

以前、私はクモが苦手だったので、ある来園者の人がとても詳しくクモについて話してくれたことがありました。その話がとてもおもしろく、私がクモに興味を持つきっかけになりました。

このような経験から、こちらの知識を一方的に伝えるのではなく、来園者の意識を変えるような解説を心がけています。そのため、各解説員にはマニュアルは作らず、その季節の自然の楽しみ方を五感を使った体験を通して伝えるようお願いしています。来園者が自然の中で自ら発見し、体験する楽しさを覚え、自然や昆虫に興味を持ってもらえればと思っています。

コミュニケーションでしか伝えられないことがたくさんあります。人から人へ意識を伝えることを大事に、これからも解説に取り組んでいきたいと思っています。



『たびら昆虫自然園』×『大学生』で生み出す新たな取り組み 若い発想を虫入

開園30周年を目前に控えた昆虫自然園では、長崎県立大学の学生たちの発想を取り入れ、新たな取り組みへの挑戦を始めました。その取り組みは、園だけでなく地域を巻き込んだものへと発展しています。

活気を取り戻すために

施設の老朽化や解説指導員の高齢化などの課題を抱える昆虫自然園では、こうしたら施設を適切に維持し、来園者数を安定させ、地域の皆さんから慕われる施設になるか検討を進めていました。

そんな中、長崎県立大学地域創造学部公共政策学科による実習とインターンシップの打診があり、今後の施設運営のあり方を検討するひとつのきっかけになることを期待して、受け入れに踏み切りました。大学生の若い発想を虫入(ちゅうにゅう)して活気を取り戻そうと考えたのです。

燃える闘魂100本ノック

令和2年度は3年生6人を田平町へ招き、現地視察や関係者との意見交換会、夜の観察会への参加などを経て調査結果報告会を開催。「燃える闘魂100本ノック」と称して捻りだした100ものアイデアの中から、厳選された「10のアイデア」が提案されました。

その10のアイデアの中から、PR動画制作と季節の花園づくりなどにトライすることが決定されました。

- 1_フィールドワークで昆虫自然園を見学する長崎県立大学の学生。/2_大学生が制作に携わったPR動画の一幕。落ち葉のベッドに寝転び楽しそうな園児たち。
- 3_「平戸ミステリーローズの会」など地域の関係団体と協力しバラを植栽。バラのほかにやぶ椿や季節の花々を植えた。
- 4_学生が解説指導員一人ひとりにインタビューして制作した冊子。解説指導員の魅力あふれる冊子が完成した。

大学生が制作した動画はコチラから



10のアイデアを関係者に提案する大学生

PR動画制作では、昆虫自然園を含む田平町の魅力的なスポットを紹介する動画や若葉保育園の園児が園内を散策する様子を撮影。作品は、「NCCふるさとCM大賞」に応募し、見事に映像賞を受賞しました。

また、季節の花園づくりでは、これまであまり交流がなかった「北松農業高校」や「平戸ミステリーローズの会」、やぶ椿の愛好家をつくる「向花樹会」、「田平まちづくり協議会」など地域の関係団体を巻き込み、園内の一部に花が植えられました。四季折々の花を楽しめる「ガーデン」が完成間近です。

このように大学生のアイデアを

通して、これまで交わることのなかった地域の団体との繋がりが生まれ、地域の資源を活かした取り組みが進んでいます。

個性豊かな解説指導員に光をあてて

令和3年度も大学生を受け入れ、さらなる取り組みに挑戦しました。新型コロナウイルス感染症の急拡大を受け、活動が制限される中、この年は昆虫自然園を支える「解説指導員の会」にスポットライトを当てて何かできないか検討を重ねました。

そして、常時活動している9人の解説指導員にインタビューし、冊子にまとめる事が決定しました。インタビューでは、解説指導員一人ひとりの「生い立ち」や昆虫に興味を持ったきっかけ、昆虫園に対する想いが語られ、それぞれのライフヒストリーと魅力が詰まった冊子が出来上がりました。

冊子は子どもたちも親しみやすいようにと、解説指導員の皆さんを「昆虫戦隊ガイドマン」というヒーローに見立てて紹介しています。令和4年度は、この昆虫戦隊ガイドマンを活かした新たな取り組みにも注目です。

Interview

「地域を支えているのは人であることを改めて実感」

地域で30年間運営されてきた施設に対する地域の皆さんの思いこそが、重要な地域資源であると学生に感じ取ってもらいたいとの思いをもって、実習を実施しました。

学生のアイデアを受け止め、やぶ椿やミステリーローズに思いを重ねてガーデンを形にしていく平戸の皆さんのフット

ワークの軽さや、解説指導員の皆さんのお話からは、まさに平戸の自然を体験してきた皆さんが、園を無二のものにしていくことがヒシヒシと伝わってきました。

「地域を支えているのは人」ということを改めて思い直す機会となりました。今後も園が地域の皆さんの思いを受け止める場であり続けることを応援していきます。



長崎県立大学非常勤講師のぶよし 川崎 修良 さん

昆虫自然園に彩りを～ひっそりと咲く「平戸ミステリーローズ」を植栽～

市内には、人知れず咲き続ける古いバラが残されています。平戸出身の園芸家油屋吉之助さんの「平戸に残る古いバラを調査してみた」という提言から「平戸ミステリーローズの会」が設立されました。地道な調査・研究の結果、現在までに約30種類のミステリーローズが見つかっています。

「バラを地域の活性化に繋げられないか」という油屋さんの想いを汲んだ平戸ミステ

リーローズの会の取り組みが少しずつ実を結び、北松農業高校の教材として採用され、昨年は昆虫自然園にも新たな鑑賞ポイントとして植栽されました。

長い間人知れず生き残ってきたバラは、美しいだけでなく病害虫に強く、農薬が使えない昆虫自然園にうってつけの花です。美しく可憐な花を咲かせるミステリーローズが来園者を出迎えます。



園内に植栽した平戸ミステリーローズの1つ「唐衣」(からごろも)。



昆虫クラブでのピザづくり体験

園外の自然観察に参加した昆虫クラブの皆さん

釜田川に生息する生き物を観察



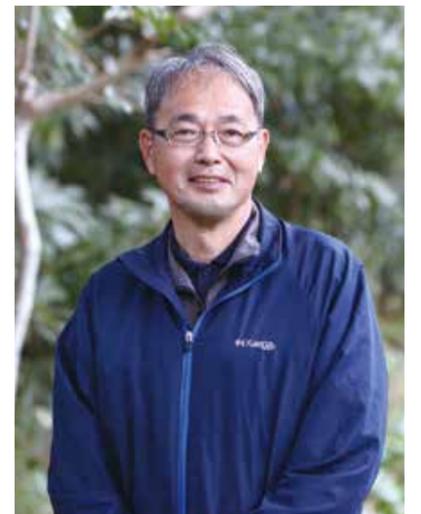
開園30周年に向けて

たびら昆虫自然園は開園30周年にむけて大学生の発想を取り入れ、地域を巻き込みながら準備を進めてきました。「屋外体験型の施設」「解説指導員による案内」という2つの強みを活かしながら、30周年の節目とその先に続く未来をどう描いていくのか。たびら昆虫自然園の今村主任に話を伺いました。

懸命に生きる昆虫に心惹かれて

私は地元の高校卒業後、いくつかの職場を経験し、平成14年に当時の田平町から昆虫自然園の管理運営を受託する財団法人田平町振興公社(当時)に就職しました。最初は園内の管理作業を担当していたのですが、園長が不在の時に始めてガイド役に挑戦し、お客さんの反応を直に感じられることがとても嬉しく、昆虫のことを勉強するようになりました。

「年代にとらわれず、いつまでも心に残るような場所として育てていきたい」



たびら昆虫自然園 主任
今村 武 さん

それからは試行錯誤・創意工夫の連続です。今では、小さな命でも一生懸命に生きていることを感じさせてくれる昆虫が大好きになりました。助け合いながら上手く生き延びている虫たちの様子には、心惹かれるものがあります。

たびらは「まると」と自然園

令和3年度は年会員の「昆虫クラブ」の皆さんとゆるんな取り組みを試してみました。焼き芋で焼き芋を

焼いたり、手作りのかまどで豚汁を作ったり、園外に出かけて田平町内の自然を観察したり。このような取り組みを通して田平町全体が昆虫自然園と同じように「自然体験の場」であると考えるようになりました。

開園30周年となる今年は、これまでの取り組みで生まれた北松農業高校、田平まちづくり協議会、向花樹会、平戸ミステリーローズの会など地域の仲間たちとの信頼関係を基に、新たな楽しい仕掛けを園内外で講じていきます。

これからも、昆虫自然園に残る里山の原風景を大切にしつつ、子どもも大人も年代にとらわれず、いつまでも心に残るような場所として育てていきたいと考えています。まさに地域にとつての宝ですね。

長崎県立大学との取り組みなどを通して、これまで停滞ムードに見えていた昆虫自然園にも新たな動きが芽生え始めました。施設の課題に自ら気づき、地域住民を巻き込んだ展開が広がり、一人ひとりの目に新たな課題と「未来の夢」が見えてきたと考えています。コロナ禍の厳しい状況においても来園者のさらなる満足度向上にむけ、「たびら昆虫自然園」はこれからも挑戦を続けていきます。

田平町出身。園の運営・管理を担当しながら、解説指導員としても来園者を案内している。好きな昆虫は助け合いながら生きる様子を見せてくれるカナブン。